



名作の世界を旅しよう

八中の名作シリーズの作家（生まれた順） と先生方のおすすめの小説	作家の紹介（おすすめの小説が複数の場合） あるいは 小説の紹介
 <p>森 鷗外（1862～1922） 『高瀬舟』 『山椒大夫』など</p>	<p>『高瀬舟』も『山椒大夫』も歴史小説ですが、歴史をそのままではなく、歴史上の人物に現代的な視点や解釈を加えたフィクションとして書かれている。晩年は史実に徹した「史伝」を書くようになった。</p>
 <p>夏目 漱石（1867～1916） 『坊っちゃん』</p>	<p>「親譲りの無鉄砲で小供<small>こども</small>の時から損ばかりして居る」で始まる『坊っちゃん』は、四国の松山中学に赴任した江戸っ子の「坊っちゃん」が周囲の不正と戦う痛快な物語。人間の善良さ順朴さを美として描いた作品。</p>
 <p>志賀 直哉（1883～1971） 『小僧の神様』 『清兵衛と瓢箪<small>ひょうたん</small>』など</p>	<p>人間の個性を尊重しようとした「白樺派」の作家である志賀直哉の作品は、自分の体験や思いを題材にすることが多いが、感情に流されず客観的にとらえた簡潔な文章で、文学史に大きな影響を与え、小説の神様と称された。</p>
 <p>芥川 龍之介（1892～1927） 『鼻』『芋粥』『トロツコ』 『蜘蛛の糸』『杜子春』など</p>	<p>東大在学中から小説を書き、『鼻』は夏目漱石の激賞を受ける。現実や人間を理知的に捉え、巧みに表現した。鷗外と漱石というふたりの文豪の影響を受け、古典を題材に近代的な主題を盛り込んだ小説を書いた。</p>
 <p>宮沢 賢治（1896～1933） 『銀河鉄道の夜』 『風の又三郎』など</p>	<p>冷害に苦しむ東北の地で裕福な商家に生まれたことに負い目を感じていた彼は、日蓮宗に帰依し、農業指導に献身的に働いた。豊かな空想力による独自の宇宙観と賢治自身の広い心が作品の魅力となっている。</p>
 <p>井伏 鱒二（1898～1993） 『屋根の上のサワン』 『山椒魚』など</p>	<p>現代文学の作家としては最も息の長い作家のひとりだが、その文学姿勢は一貫して常に平常心は失わず、徹底して庶民の日常を見つめ、感情を抑制した独自のユーモアと哀歓をもって表現された。</p>
 <p>川端 康成（1899～1972） 『伊豆の踊子』</p>	<p>孤独なため、ゆがんだ心の自分がいやになり、伊豆へ一人旅に出た一高生の「私」は旅芸人の一行と道連れになる。その中にいた十四歳の踊り子に淡い恋心を抱く。素朴な恋は「私」の心を洗い流す。</p>
 <p>壺井 栄（1899～1967） 『二十四の瞳』</p>	<p>昭和三年の春。瀬戸内海の小さな島の分教場に若い女の先生がやってきた。先生が受け持ったのは十二人の一年生。先生と教え子たちとの心温まる物語。</p>
 <p>井上 靖（1907～1991） 『しろばんば』</p>	<p>舞台は伊豆湯ヶ島。洪作は五歳時から、両親と離れ、曾祖父<small>おぢい</small>の妻だったおぬい婆さんと土蔵の中で暮らしていた。周囲の冷たい視線の中おぬい婆さんは洪作に愛情を注ぐ。作者の自伝的小説。</p>
 <p>太宰 治（1909～1949） 『お伽草紙』</p>	<p>太宰治の作風は三期に分けられるが、『お伽草紙』は『走れメロス』同様、井伏鱒二を頼って山梨県に行き、家庭を築いた中期の作品のひとつ。お伽話をもとに奔放な空想力で語った「読んで面白い小説」。</p>

生徒手帳に入る大きさで読書記録が付けられるパンフレットを用意しています。ぜひ活用してください。記入して、感想などを聞かせてくれたら、特製しおりをプレゼントします。